

2) 養殖アユの冷水病について

里井晋一・津村祐司

〔目的〕平成3年以来、県下のアユ養殖場で流行している疾病を調査し、その原因と対策等について検討した。

〔方法〕本病の発生状況、病魚の症状、病原菌、薬剤の感受性等を調査するとともに、アユを用いた人為感染試験と野外治療試験を実施した。

〔結果〕平成3年12月頃より、県下のアユ養殖場で本病の発生が認められた。平成3年12月から平成4年9月までの本病の診断件数は26件で全体の22%と最多であった。症状は種苗では、脂鱗付近から尾柄にかけての潰瘍、筋肉の出血、鰓や内臓の貧血、成魚では鰓や内臓の貧血が特徴的であった。病死魚の体表患部や肝臓等より菌を分離し、サケ科魚類の冷水病の原因菌の抗血清との凝集反応からフレキシバクター・サイクロフィラスと同定された。病死魚からの分離菌の薬剤感受性試験から、感受性の高い薬剤はテトラサイクリン、ドキシテトラサイクリン、中程度の薬剤はスルファモノメトキシシンとオルメトプリムの合剤、クロラムフェニコール、アンピシリン、低い薬剤はオキシリン酸、硫酸コリスチン等であった。稚アユ(1~4g)を用いて、背筋部に 10^6 CFU/fishの分離菌を接種し、約10℃の水温の飼育水槽に収容して観察したところ、接種3日後から斃死が始まり9日後には100%斃死した。全ての斃死魚より接種菌が回収できた。なお対照魚には斃死はなかった。N養魚場で冷水病の発生が認められたので薬剤感受性の高いドキシテトラサイクリンを用いて野外治療試験を実施したところ、A池、B池とも0.25g/kg/dayを5日間経口投与することにより顕著に治療効果が認められた。なお、治療後に、生存魚より菌分離を行ったがA池、B池ともフレキシバクター・サイクロフィラスは分離されなかった。